

PHD LETTER

69

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1998・12

- スマトラの農村から初の研修生を選考……………3P
- 予防と移さないことへの理解……………5P
- ツアーで地域が繋がった……………6P

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行： 財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人： 藤野 達也
住所： 〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL(078)351-4892 FAX (078)351-4867
定 価： 100 円



大きな川で腰までつかり魚とり。
お母さんとお姉ちゃんが
捕まえたのをあつめる仕事が私の役目。
ホラみて、今夜のおかず。

ネパール 撮影：FUJINO.T

東西南北 問題解決取組 日記

8月〇日

7月のPNGツアーも雨が多かったがスマトラも雨。今年のは出かける先々で雨が降り、スマトラはこれまで漁村から研修生を招いてきたが、新たに農村から招くために、これまで2回の予備調査を行ってきた。3度目の訪問となった今回はスタディツアーも兼ね、その道中人選を行った。(詳しくは次ページで。)

経済状態の悪化は国民の生活を直撃していた。漁村、農村で食べるものを作っている人たちはまだやっていると、マチでお金で食料を買う人々には厳しい。去年の暮れに出かけたときは、1円=30ルピアだったのが、今回は1円=70ルピア。日本からお金を持って行って両替すれば物価上昇を差し引いても得た気分になるが、インドネシアが輸入するときにこの為替レートはきつい。今、パダン市で生活しているアフナルさん(88年研修生)も、奥さんの父親からマチ暮らしをやめて田舎で食堂でもやったら、と言われて困っていると話してくれた。

一方、パシルバルー村は、海流の変化なのか、ここ2ヵ月豊漁続きで漁師衆にはこやかな表情。村長選が来年にあり、アリスさん(87年)も推されているという。今の村長さんのやり方には意見のあった彼が選ばれれば、ちょっと面白いことになるか。子供を生んだばかりのハスマヤニさん(92年)に立候補をすすめる村人もいたそうで、この村のPHD研修生は、村での評判がいいよ

うだ。もう一人の研修生サムスアリスさん(90年)のところは家を改築中で、家族全員がその家の隣の小屋に家財道具一式と寝る状態で、私たちが泊まることは今年ではできなかった。アイルバングス村では会うことはできなかったが、ウピさん(96年)には子供ができ、ファイジンさん(88年)は結婚したと親戚から聞くことができた。



米とさとうきびがタバ村の主要作物

9月〇日

特定非営利活動促進法(いわゆるNPO法)が施行され、法人格を得ることが以前に比べて容易になってきた。

PHD協会は任意団体として1981年に設立、翌82年の財団法人化で法人格をもって活動してきたので、このたびの法律は直接の関係はない。

その上に84年から税制上の優遇措置のある(今回の法律には優遇措置はない)試験研究法人等の認定(90年以降、特定公益増進法人に名称を変更)を受け、以来更新を2年毎に重ねてきた。今回の更新については国家財政の厳しさもあってか、審査が以前にも増して細かく、寄付額、その用途、活動内容等を審査されたが、9月10日付で認めていただいた。更新にお骨折りいただいた関係の方々、そしてPHDの活動を支えて下さっているすべての皆さん

に感謝申し上げるとともに、この税制上の特典を大いに活用していただければと思う。具体的には個人の所得額から寄附額が控除され、法人の場合は寄附が損金扱いになり、税金が少なくなるものだ。もちろん年末募金にも適用される。(特典の詳細は最終頁に説明があります。)

9月×日

今年もNGO大学が始まった。これは、関西で国際協力を行っている団体の集まりである関西NGO協議会が主催する半年がかりの一泊二日、全6回の国際協力のための講座である。加盟団体の職員や講座修了生10人余が運営委員となり、60人を越える学生、社会人の参加者を集めて実施している。PHD協会は87年の第1期から、企画・運営に関わり、職員・ボランティアが参加もしてきた。94年からは私も校長としてまとめ役をおおせつがっている。最近はこのような講座はあちこちで行われているが、一泊すること、ただ講師の話聞くだけではなく、ゲームやグループ討議など参加型の学習形態をとりいれていること等が特徴である。さらにここ最近、NGO間の協力、連携の強化が求められているが、そのひとつの場としても位置づけられる。自分の団体のことだけしか見ていないと、客観性に欠け、事業や運営面でおかしなところに気づかないこともあるかもしれない。儀礼的な場以外で他の同業団体の人々と交わり、意見を交換することの意味は大きい。

本番の講座は一般参加者の学びの場であるが企画、準備段階は運営委員の学びの場としての意義も深い。

PHD協会も学ぶ姿勢を常に心がけてやっていきたい。

総主事代行 藤野達也

年末募金にご協力お願いします

阪神大震災以降、4年近くを経ようとする今、社会におけるボランティアに対する理解や市民の参加度は以前に比べて確実に広がりました。同時に、国内だけでなく国境を越えたところと同じような事故や事件で苦しむ人への共感も、以前より強くなったといえるでしょう。

タンカーからの重油流出事故時の海岸を掃除するボランティア、パプア・ニューギニアでの地震による津波被害への関心や支援の輪の広がりは、それらの表れといえるのではないのでしょうか。

特定非営利活動促進法も施行され、市

民活動を支援する体制は限定的ながらも徐々に進みつつあります。

そういった世論の盛り上がりは、本来私たちのような国際協力団体には追い風となるはずなのですが、現実にはそうとも言い難い状況があります。

震災後の世論の盛り上がりを受けて、たくさんの方々が市民団体が立ち上がりました。そしてそういった中でも緊急救援には、人目を引くニュース性とマスコミ等から提供される情報量の多さがあり、協力が集まりやすいといえるでしょう。

どんな活動でも最初は勢いよく立ち上がり

ますが、それを継続していくには、そういった勢いはまた別の質のエネルギーが必要だと思えます。

PHD協会の「人づくり」は長期的な取り組みの中でこそはじめて成果が出てくるものであり、それにはみなさんの継続したご支援を必要としています。

「底無し」といわれるこの不況の中でみなさんに更なるご支援をお願いするのは心苦しくもありますが、アジア・南太平洋地域の草の根の人々の苦勞と頑張りを支援するため、この年の瀬に分かれ合いをお願いしたく存じます。

スマトラ 農村から初の研修生を選考

～第12回 インドネシアスタディツアー報告～

これまでの漁村に加え、山の村滞在を組みこんだ今年のスマトラ。10人の参加を得て8月22日～31日に行いました。

研修生の選考に立ち会いました。

松本直樹(神戸市・教員)

10年ぶりにスマトラツアーに参加した。私にとって来年度の研修生の選考は副次的な目的であったが、立ち会わせていただくことになった。

招へい対象の村は西スマトラ州ソロ郡タバ村、インド洋に面した州都パダンから内陸に車で3時間以上かかる山の村である。州政府からIDT(貧困度ランク最下位)の指定を受けている。

到着した夜は5人程が候補とされていたが、翌日朝には10人が集まった。まず、藤野さん(職員)が研修の目的やあり方を説明し、帰国した研修生アフナルさん(88年)、ラッドさん(94年)が通訳、伊藤さん(職員)が記録と分担。候補者に調査用紙の課題・問題、日本での研修希望を記入してもらった。そして個別の面接が開始された。

対象者は18歳から30歳。若い人たちは日本に行きたいという意気込みの強さを感じられるが、農業経験の不十分さを感じた。一方、年輩の人々には問題意識やグループ作りなどの経験もみられた。親の死亡による経済的理由で高校中退の人もいたり、農業だけでは収入が十分ではないので、パダンまで農閑期に大工の手伝いに出ている人もいた。また彼らの多くが現在よりも収穫量を増やしたい、肥料を買いたいとの切実な願いを持っていることがわかった。こんな状況を知る一方、藤野さんは化学肥料や農薬の問題点や有機農業の有効性を説明しながら、面接は昼すぎまで続いた。

昼食後に有力な候補者の家庭を訪問。家族にも会い、その後村内と田畑を見てもらった。夕刻、面接の結果から、候補者の意欲、農業の経験、村での活動、残される家族の生活のこと、研修後の村への影響力など様々な観点を整理。アフナルさん、ラッドさんの意見を聞き、同席したツアー参加者の意見も参考にして、ダスウィルさんに内定し、発表は翌朝となった。

彼は30歳。村の農業グループのまとめ役であり、村の広報活動も担っている。

3日目の朝、藤野さんが村長に選考の経過を説明、了解の上、発表となった。8時半、候補者が集まり、緊張した雰囲気か漂うなかダスウィルさんの名がよばれると、大きな拍手がおきた。これは私の心配事一選にもれた人々かのような反応をするかーをふきとばすものであり、村人のダスウィルさんへの期待の表れでもあった。拍手を受けて、彼は立ち上がり「PHDの意義を理解し、村の代表として成果が上がるように責任をもって努力する」とあいさつをした。



研修生決定後、挨拶するダスウィルさん

熱い決意

渡辺喜太郎(東京都)

研修生決定後のダスウィルさんの挨拶の中で、彼がタバ村を代表して、PHDの研修を受けることの意味を熱く語った。その言葉を聞きながら私は彼の強い使命感と郷土愛を感じ、久しぶりに胸が熱くなるのを覚えた。

おばあさんの「こんにちは」

松本 碧(神戸市・高校生)

タバ村で出会った一人のおばあさんにインドネシア語で挨拶をしました。するとそのおばあさんは日本語で「こんにちは」と言いました。聞きまちがったかと思い一緒にいたラッドさんの方を見ました。するとラッドさんも驚いていました。山の村で他の人は日本についてほとんど知らないのに、一人のおばあさんは日本語を知っている。なぜ知っているのか色々聞いてみたいと思ったけれど、おばあさんは行ってしまいました。パシルバルー村では「君が代」や軍歌を歌ってくれたおばあさんがいました。他のことなら日本のことを少しでも知ってくれていると、喜ぶはずだけれど、私の気持ちは複雑でした。それは私に「戦争」

という言葉思い出させるからです。プキティンギのジャパニーズトンネルからわかるように、日本は戦争でインドネシアに大きな傷を与えたと思います。戦争から50年以上たった今、日本から大勢の人がインドネシアに傷を与えたとするならば、その傷を癒すのも日本人がしていかなければと感じました。

観光旅行じゃないから

古賀由紀(宝塚市・勤め)

出かける前には不安でしたが「毎日生活している人がいるんだ」と思うと、村の暮らしになじむことができました。

はじめてなのに――

松本郷一郎(神戸市・中学生)

僕たちは急に村にやってきた。研修生を選ぶためにといっても、何か迷惑がかかったはずだ。それなのに村の人はとても親切だった。

私の宗教は?

山口 基(向日市・大学生)

子供に宗教は何か、イスラム?ときかれた時はびっくりした。仏教?キリスト教?ときかれるたびに首をふり続けたが、納得がいかない様子だった。

ナマの体験

近藤大輔(神戸市・大学生)

こんどの体験は言葉にかえるのが難しい。ツアーの後、写真でみると全然違う。行って、体験しないとわからないものがあることがわかった。

ここでは金持ち

志馬一由(東大阪市・大学生)

物価が上がり、失業者は増え、厳しい状態と聞きました。ホテルの人に「千円は7万ルピア、君はお金持ちだ」と言われたのをよく覚えています。

研修のその後

松本ちづ子(神戸市・教員)

日本での研修のすべてが、村で生かさない事情があることがわかり、研修の難しさを知りました。しかし「研修」を通じて互いが知りあい、互いの向上に役に立っているという意味において、これまでの活動は目的を果たしてきているのではないのでしょうか。

16期生

研 修 生 し ぽ ー ト

9月には前半期をまとめるレポートを書きました。慣れないレポート作成に4人とも四苦八苦しましたが、仕上げて後半の研修に入っています。今後は、興味を持ったこと、帰国後村に役に立ちそうなことを深めることが課題です。

サビトリ・バスターラさん
ネパール

宍道町健康センター、東出雲町役場、シオン保育園、佐倉真喜子氏/田井道夫氏、曾田育夫氏、佐藤玲子氏、金本勉氏(島根県宍道町、東出雲町、西ノ島町)～岩佐康子氏(姫路市)～丹南町健康福祉センター、下吉富久子氏/渡辺省悟氏、杉原一三氏(兵庫県丹南町)～白井良江氏、松本百合子氏、三崎三千代氏/春日町社会福祉協議会、白井澄雄氏、加賀野洋美氏(春日町)

サビトリさんは、洋裁を中心に研修を進めています。洋裁は、何をどれだけ作ったかを基準に評価しがちですが、作ってみたことと、作れる(人に教えられる)ことは別です。繰り返しの練習、練習することも大切な研修です。



2人で洋裁を学ぶサビトリさん、ゲオリさん (姫路の岩佐さん宅にて)

今夏のスタディツアーでサビトリさんの出身地ポカラを訪ねて下さった下吉富久子さんが編み物、洋裁を指導して下さいました。編み物をきれいに仕上げるために、何度もほどいては編み直しました。下吉さんいわく、「ポカラの研修生のグループの人たちは編み物、洋裁を覚え、現金収入にしたいと話していました。家族のためだけに作るのなら、多少難があってもいいですが、他人に買ってもらうなら、きれいに仕上げるのが大切。サビトリさんにとっては、よりきれいに仕上げるために手間をかけるのは、慣れていなくて大変でしたが、厳しくやり直してもらいました。」

サビトリさんは、2、3回ならいい、5回、6回と直すのは嫌だったけど、きれいに出来上

がるのがわかったと話しています。

ゲオリ・カビンさん
バプア・ニューギニア

鴻谷美江子氏(神戸市)～尾崎食品株式会社(神戸市)～岩佐康子氏(姫路市)～但馬農業高校、西沢康裕氏/曾我一作氏(兵庫県八鹿町、豊岡市)～小林勉氏、高松農業高校、川上農業高校/逸見広心氏(岡山県瀬崎町、岡山市、川上町)

最近では、食品加工の研修を多く行なっています。尾崎食品では、豆腐やおからを使うお菓子など大豆の加工食品を学びました。のんびりしているゲオリさんは、忙しい尾崎食品の時間の流れになかなかついていけませんでしたが、満足のいく研修となりました。

ゲオリさんの住むマワネン村の食生活は、だいたいバランスが取れているようです。けれども身体を作るタンパク質類が不足気味なので、今以上に豆を食べることができればと豆腐に関心を持ちました。この類の食品の中では、マワネン村では豆を多く摂取していますが、豆腐は消化が良いので赤ちゃんやお年寄りも食べることができます。また、豆類は畑に植えると根っこにある菌が空中の窒素を地中に取り込むため、輪作には欠かせない作物です。大豆を作って食べると、人間の身体にも畑の健康にもいいですとゲオリさんは話しています。農業と栄養、両方を学ぶゲオリさんならではの感想です。

サワン・ナンタポーリスさん
タイ

吉田吉彦氏(兵庫県氷上町)～石垣信也氏、田中光彰氏、鈴木正明氏、原口昇市氏、(鹿児島県高尾野町、出水市)

来日当初、研修希望としてサワンさんは、家畜の病気の治し方をあげていました。けれども、かなり専門的な研修になるため、基礎知識の有無、言葉の問題があり、おいそれと実施はできません。

平飼養鶏をしておられる笹間さん宅(8月12日～9月2日)での研修中に、鶏に病気がでました。その時、笹間さんは、ニンニク、くん炭*を餌に混ぜて与えて見守り、結局、病気は広がらませんでした。笹間さんによると、日本での自然養鶏の場合、病気が発生

してもそんなに問題になることはなく、数羽が死ぬぐらいで広がることはほとんどないそうです。なぜなら、風通しのよい環境で飼育、鶏にストレスが少なく、体力があるからだそうです。身近で餌の材料になるものが簡単に入手できる日本では鶏に十分な栄養が与えられるのですが、サワンさんの村で病気が問題になるのは、鶏の栄養が不足しているのかもしれない、とのことでした。サワンさんは、病気の治し方を勉強するより、飼育方法を勉強する方が、簡単で村でも実践が可能だと話しています。

*くん炭・^{もみ殻}・^{もみ殻}から作る炭。炭を食べると身体の中の悪いものを吸着して体外に排出するといわれています。



笹間さんから話を聞くサワンさん

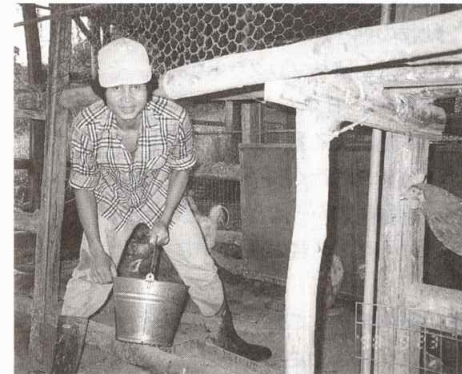
ブラチャク・ムアンチャンさん
タイ

吉田吉彦氏(兵庫県氷上町)～西川則孝氏(愛媛県丹原町)～渋谷喜喜男氏(神戸市)

稲の刈り取りも終わり、稲作について、復習しました。ブラチャクさんの村と日本の米作りは、ずいぶん違います。タイでは、苗代を作らず田んぼに種もみをばらまき40～50cmぐらいになると半分は切り、5本ぐらいずつ田植えをします。それに対して日本では、約20cmの苗を、3～4本ずつ植えます。彼の目で見ると日本で研修した農家の稲の方が丈夫なので、帰ったらタイと日本の両方の方法で栽培してみたいと話しています。

こういった栽培法の違いは、気候、風土、稲の品種の違いからきていることもあり、必ずしも、日本と同じように作ればうまくいくとは限りません。例えば、タイの稲は、分けつ能力が

低いので密植するということもあります。タイの方法を基本的に色々試してみる必要がありそうですが、ブラチャクさんは失敗してもいいように少しづつやると穏やかに話しています。



西川さん宅で養鶏を学ぶブラチャクさん

予 防 と 移 さ な い こ と へ の 理 解

NTT健康管理所で保健婦として働く井上由美江さんが今年度研修生ゲオリさんの通訳をきっかけに事務所にボランティアとして来て下さっています。井上さんは、1991年から2年間ソロモン諸島国で青年海外協力隊員として、村での巡回診療、乳幼児・妊産婦検診や健康教育等の活動をされました。ソロモンはバプアニューギニアの隣で、言葉、食習慣、自然環境等似た点が多くあります。

PHD(以下P): PHDの研修は、専門家でなく、誰でもできることを学ぶのが目的です。ポイントは何かと思われませんか?

井上(以下I): 衛生観念を皆が持たらないですね。例えば、ソロモンは皮膚病が多いのですが、まめに体を洗い、服や寝具を太陽にあてたら、何度も同じ病気になること、人に移すことも減ります。他には、病気になった時どの段階で病院へ行くべきか、また、簡単な応急処置を学んで欲しいです。

P: 研修場所として、適当なのは?

I: 応急処置は、救急病院では専門的過ぎるので、学校の保健室のような所が適していると思います。一番必要なのはやはり、治療より病気がならない「予防」と他の人に「移さないこと」を学ぶことですね。「移る」という理解がないから、母親の風邪が子供たちへ広がっていく。寄生虫も、手をきちんと洗わない

国内研修生

鬼木たまみさん
(女性、32才)



10月から国内研修生として、研修を始めました。2年間の会社勤めと、5年半の大阪の国際交流団体で働いた経験を持つ、PHDにとっては強力な助っ人でもあります。PHDの活動、運営について学びます。将来は、人とつながりの深い仕事をしたいとか。鳥取県出身、大阪府在住。とても明るく、元気な人です。ネパールの研修生ラダさんの娘ジャヤさんにそっくり。



ホストファミリー募集

来年3月に来日する17期生4名の滞在家庭を募集します。詳しくはお問い合わせ下さい。

期間: 1999年4月から1年間。はじめの6週間は毎日、以降月平均7日程度。
場所: 神戸三宮まで1時間程度で通える範囲。
経費: 当会規定の食費、滞在費をお支払いします。

研修生

- ・アキガオ・ネバン (バプア・ニューギニア、男性、35才)
- ・タンジュン・ダスウィル (インドネシア、男性、30才)
- ・エドアルド・アコスタ (フィリピン、男性、46才)
- ・ポーディ・ファイサップディー (タイ、女性、21才)

問題を学ぶことは大切なことですね。帰国後、村の人に伝えるのに一番苦労するんですが、良い方法はありますか?

I: 帰った直後は、皆興味を持ってくれるでしょう?でも、話だけだとよほど話の上手な人でないと継続は難しいので、衛生でも栄養でも、実際に見せることが効果的です。3つのグループなら、実際に食品を並べて分類して見せるとか。それが本当に受け入れられるのは、皆が理屈だけでなく効果を感じて納得してからなので、とても時間がかかります。でも、研修生の場合は、私たちが行くのと違って、村に住んでいてしかも村の言葉で説明するのだから、あきらめないでと言いたいですね。あとは、研修生は専門家ではないから、地域の専門家と連絡を取ることを勧めます。ゲオリさんの村はお医者さんが巡回診療に来るそうなので、その人と連携を取ったらいいと思います。

P: この半年間ゲオリさんを見ていて?

I: 好奇心が強く、何でも知りたいという意欲を持っていますね。今までは、衛生や栄養など色々なことを広く浅く見てきて、今後は、どれだけ焦点を絞れるかだと思います。ただ、どこまで詳しくやるのかは難しいところですね。ゲオリさんは、のんびりしているようで、繊細な所もあるので、文化の違う所の生活に気を遣って、大変な時もあるようですが、明るく頑張っていますね。日本に来てからの6ヵ月間は「短かった」と言っていました。後半も充実した毎日を過ごして欲しいです。

P: あります。予想される変化に伴って起きる

ピスタ君 (82 年研修生) は、SSS (サマ・セウ・サムハー社会奉仕グループ) 機関誌のあいさつの中で、「自分は村で生まれ大きくなった。そして村は私に多くのことを教えてくれた。だから、私はSSSを仲間とつづいて村を良くする」といっている。

思えば、SSSのプログラムを実施している山の集落へ一時間かけて行った時、その集落から見える次の山並を指さして、「お父さん、私の生まれたところは、あの山のむこう」と言った情景が、今でも目に焼き付いている。又、小松・小嶋氏と三人で来た「知事や国会議員クラスに推挙された道をなぜ断ったのか」の問いに、「党のことばかりで本当の村のことを思っていない。私の性格には合わないし好きではない。」それならなぜ村長をやめたのか、村長とSSS理事長を兼ねている方が村づくりはし易いのではないかと問いに、「村長の仕事は村人の指示の要求や後始末ばかりが多く、そのことで時間をとられ、本当の村づくりができない。村長をやめても村人たちはSSSは必要だと思っているからよく協力してくれているので心配はい

らない」という答えが返ってきた。

SSSの活動に取り組む村は今では50あまり。プログラムは100を越え、49名のスタッフ (うち理事11名、事務所14名) がサポートする。一番多いプログラムは「飲み水の確保」でメンバーが最初に取り組んだ仕事。今では29の村で完成しサポートはやや落ち着きつつあるという。飲み水の確保は衛生上の問題だけではない。ネパールの集落は起伏の多い山の中腹や頂上に点在することが多く、水は大切なものだが、生活に使う水汲みは女性の負担として重くのしかかっている。水汲みだけではない。出産・育児・炊事・農作業とネパールの女性はよく働く。男性は、節目での重労働はするが、あとは昼寝やパクチなどをしてることが多く、極端な男性社会である。

カトマンズで出会ったショーバナさん (85年) は言う。「女の子ばかり4人も続けて産むと、違う奥さんをつれてきて、男の子が産まれるまで産み続け同居する。ネパールの女の人はかわいそう」と。就学率も女性では25%、男性75%とピスタ君は心配する。

村に水道を引いて、水汲みから解放すると女性も勉強できるし、家の近くの田畑で農作業にも励め、収入も増えるという。更に女性の地位向上のために、女性のための共済組合というプログラムも発足させている。

これら女性に重きを置いたプログラムの他は健康・保健衛生・家族計画・結核予防・診療所開設等のヘルスに関するプログラム。学校建設や識字学級などの教育プログラム、動物の餌・燃料・建築材・環境・水源などを考えた植林プログラムもある。そういえば16年前、日本から帰ると、葉っぱが動物の餌にも使える木「イビルイビル」の研究のためインドに行くと言っていたことを思い出す。農林業が一体となったプログラムはその時からピスタ君の頭の中にあっただけであらう。

研修生の案内があつてこそ、生活の生々しい現場と文化にふれさせてもらい、多くの驚きと感動と学びを与えられた。

渡辺省悟

(一期生からの研修指導者、PHD協会評議員、「たんば農文塾」代表)

ツアーで地域がつながった

第11回 ネパールスタディツアー報告

2月はじめ丹南国際理解センター(兵庫県丹南町) から夏にネパールに行きたいとの相談がありました。丹南町はこれまでに研修等でお世話になっているところ。研修生のフォローアップを兼ね、職員小松の同行で全15名、8日間の旅を行いました。

ネパールに行つて一番心に残ったことは、空港で出会ったラジムのことです。空港で荷物を運んでチップをもらったり、物を売ったりしていました。そういう姿を見ていると必死に生きているんだなと思ったし、心がズシッと重くなったように感じました。

到着のとき会ったラジムはとても元気な顔をしていたのに、帰るときは青い顔をしてチップをほしいといいました。何日も食事をしていなかったのかもしれないし、病気にかかっていたのかもしれないと思いました。でもチップをあげられませんでした。ラジムは泣きそうな顔をしていました。飛行機に乗っているときも、日本に帰ってから、ぼくはラジムの顔が忘れられませんでした。あのとき、さいふのなかに6ルピーが残っていたし、あめが一袋あったからそれだけでもあげたらよかったと思いました。

6ルピーをぼくは大切に残しておこうと思います。

森口公哉 (丹南中学校1年)



山の村(ジュディガオン)でピスタ君(右)より話をきく。ここでは飲み水や動物の餌のための活動が行われ、女性が地域の中で力をつけてきている。(右から2人目が渡辺氏)

学校の施設・設備は決して十分とは言えませんが、授業を受けている子どもたちの瞳の輝きは魅力的でした。

私は「教育は人なり」の思いを改めて強くしました。教育は「教育をする人間」と「教育を受ける人間」との心のつながりがある原点になっています。「教育は人なり」のことばは、「教育者」の「このことを伝えたい」とする意欲、語ろうとする真理や希望、そしてそれらの総体としての人格そのものが教育であることを語っているのでしょうし、また、「教育を受ける者」の「知りたい」という欲求、「学びたい」という意欲がその対偶としてあります。(中略)

帰国研修生の方々のたゆみのない地道な活動を思うとき、教育こそがその根底になければならないということを強く感じました。

小嶋英毅 (丹南中学校 校長)

清涼飲料水は見た限りビンで、飲んだら返すりサイクル型でした。自動販売機や缶ジュース、缶ビールは街なかでも見かけませんでした。食料品は量り売りで天秤が活躍していました。食品トレイ、パック、ラップ等、どうぞこの国には持ち込まれないようにと思つてよく見ると、買った物をコマースシャルの入れない薄いビニール袋に入れる店がある一方、古い新聞に包んでハイOK!の店。

もうひとつ。ポカラでお土産を買うため売り手の言い値が高いのか安いのかをサビトリさんに聞くと「わたし、わからない。売れたお金は今日の生活費になるこの人と、あなたが土産で買うこと、判断難しい。欲しいなら買ってあげてください。」

これまで私の中に無かった発想でした。

山岸永子 (15期生サビトリさん滞在家)

就任のご挨拶

事務局長 山西一平



岩村先生のネパールでのお働きを伝える新聞の記事を読んで、感銘を受けたのは随分昔の事のように感じます。その頃私は大阪で青少年の非行対策や健全育成の分野で子ども達とのキャンプ生活に没頭しておりました。昭和30年代後半からやみくもに物質的な繁栄を追い続けていた社会のなかで、子どもの心が歪んでいくことを体感していた私にとって、岩村先生のお働きとお考えは「まさにかくあるべし」と励まされ勇気づけられたものです。

その後、私は引き続き大阪府青少年活動財団において青少年の健全育成の指導者養成、事業の企画、施設運営、国際交流の推進等の業務に携わってまいりましたが、この度岩村先生が提唱されたPHDの活動の推進に直接かかわらせて頂く機会に恵まれ、感慨もひとしおでございます。

PHD協会は、先生のお考えである「生きるとは分かち合うこと」を実践しようとする多くの人々に支えられてその活動を展開し、アジア・南太平洋の国々の草の根の人々の中に「村の自立」を志す多くの人材を育ててきました。

私はこの分野では経験も浅く微力でございますが、精一杯努力してまいり所存でございます。このような機会を与えられました事に感謝申し上げますとともに皆様のご指導とご支援を心よりお願い申し上げます。

なお、事務局長として私が総務・財務をまた藤野達也が総理事代行として研修・啓発をそれぞれ重点的にとりまとめることとなりました。

今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

PHD NEWS

□会費・ご寄附寄託状況

1998年	8月	129件	1,203,749円
	9月	111件	3,024,870円
	10月	66件	683,609円
		306件	4,912,228円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴いたしました。ご協力に厚くお礼申し上げます。

□ご支援に感謝いたします

11月6日、東京で全日本自動車産業労働組合総連合会(自動車総連)より、福祉カンパ特別寄贈を受けました。今の厳しいご時勢には、たいへんありがたいご支援です。心より感謝申し上げます。

□6月会員キャンペーンのご報告

6月の会報といっしょに会費のお願いをしました。4月から9月までの半年に約70名の方に新たに会員となつていただき、感謝しています。さらに多くの皆様の会員としてのご参加を必要としています。引き続きのご支援、お知り合いへのご紹介のほどよろしくお願ひします。

- 終身維持会員 4名
- PHD会員 58名
- 友の会会員 12名
- 全74名

*資料等ご入用な方はお申しつけ下さい。

□引き続きご寄附に対して免税の特典

2頁記事で経過をお伝えしていますが、ご寄附に対しての税制上の優遇措置のある特定公益増進法人の認定をあらためていただくことができました。全国のNGOの中でも数少ない認定です。

□西日本研修旅行のご案内

社会学習とリーダーシップトレーニングを兼ねた研修旅行を下記の予定で行います。研修生との交流、同行希望の方お問い合わせください。
日程：99年1月中旬～1月下旬
予定コース：水俣～筑豊～北九州～広島～四国～岡山

□執行監事ご逝去

当協会執行監事(執行耳鼻咽喉科医院長)が1998年10月30日にお亡くなりになりました。享年79才でした。当協会設立以来PHD活動の発展にご尽力いただきましたことに感謝しご冥福をお祈り申し上げます。(10月10日現在)

年末年始のご挨拶にPHDの絵ハガキを!!

今年初めから販売しているPHDオリジナル写真絵ハガキ。出した人ももらった人も2度うれしい。そして、国際協力にもなります。

8枚組で500円。詳しくは同封のチラシをご覧ください。



○月×日のPHD協会

職員 山西 初登場。10月に就任。いまのところスキをみせず、つっこむための材料収集にももう少し時間が必要。よって今回は次号からの予告にとどまる。

職員 谷 研修生に同行して、愛媛へ、鹿児島へ、岡山へ。鉄道、フェリー、長距離バスを使いわけ、安く、早くをモットーに移動。これができるうちは若い。

職員 伊藤 10月18日に予定のイベントの運営委員。台風襲来で延期に。1度した準備を11月にあらためて。1行事で2度楽しいのか、2度しんどいのか。

職員 田中 M市に出張、交流会。一年前にも同じ参加者で会があり、開会前に「一年間でどれだけ成長したか拝見」と言われ、大緊張。常連支援者は手ごわいぞ。

職員 藤野 K職員作業中のワープロの電源が抜けかけているのを見つけ、これは危険と押しこもうとする親切が裏目にて、画面消え、ニラまれ、気まずく、帰る。

職員 小松 多岐にわたる業務を前にいつも一言「どうしよう」。言つて意味ないからやめなさいと言われると「けど、でも、だって」。これ毎日くり返す。

(昼ごはんを食べに出る順)

□パプアニューギニア

地震津波緊急救援のご報告

前号でご案内した標記呼びかけに対し、募金総額は、23,551,825円となったと委員会より報告を受けました。ありがとうございます。(10月10日現在)



編集後記

今年もバザーの季節がやってきました。吹田市に住んでいる私は大阪で行われるバザーにはほとんど参加します。でも、準備段階から参加したことはなく、いつも当日の販売だけをやってきました。

そんな私が先日初めて事務所でバザーの準備をしました。それも、売る品物の選択

や値段付け・物品リストの作成と箱詰めにとるまで全てです。これまでは誰かがやってくれていたのが、何も意識しませんでした。しかし、自分でやるとなるとこれが大変だということがよくわかりました。何せ、「売れそうな物を選んで」と言われ、売れるかどうかは私の判断にかかっているのですから責任重大です。

そういう背景があるものだから、バザー終了が近づくと売上げが気になり何度もリストを眺めていました。（いくら眺めても売上げが変わるわけではないのですが。）終了後の集計でそれなりに満足できる額に達してい

た事を知って一安心。でも、物品リストの字が汚く間違えそうになったり等、反省点も幾つかありました。

ただ売り方だけではなく、バザーを通してフィリピン等の作る人と、日本の買う人とをつなぐにはどうすればいいかも考えていきたいと思っています。レター紙上でも67号6頁にフェアトレードの記事がありました。皆さんはどう思われますか？ご意見をお待ちしています。

チェシヤ猫

編集メンバー：井上由美江、鬼木たまみ、
宮本雅樹

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載していません。